

神経外科医の一日

— イアン・マキューアンの超現実的小説『土曜日』 —

武藤哲郎

はじめに

2005年7月7日にロンドン同時爆破テロが起きたとき、イアン・マキューアンはバスが爆破された現場から2マイルと離れていないところにいた。パトカーのサイレンとヘリコプターの音が激しくなったとき、彼はただならぬことが起きたと感じたそうである。翌日、早速彼はガーディアン紙に「どうして人々はこのようなことがいつ起こってもおかしくないことを忘れてしまっていたのだろうか？」と記事を書いている。¹ スペインのテロから久しく、ロンドンへのオリンピック誘致成功に沸き、人々は危機感に薄れていたのではあろうか。これに先立って彼は2005年3月に小説『土曜日 (Saturday)』を出版している。その冒頭で、夜の空をエンジンから火を噴きながらヒーローに向かう飛行機が描かれている。これはテロを暗示するメタファーである。マキューアンが予想していたことがその7月に現実となったのである。

『土曜日』では今までのマキューアンの小説に見られなかった手法がいくつか用いられている。ひとつは主人公の人物設定である。2001年9月11日のテロ以来、マキューアンは変わったと言われるが、ある批評家は「彼は今までとはまったく違うことをしようと決心した。人間の幸せを書こうとした」と指摘している。² 確かに、主人公は周りのもの全てに‘euphoria (幸福感)’を感じている神経外科医である。特筆すべきは、彼は文学を解さない科学者という設定である。神秘主義に傾いていたマキューアンが合理主義の視点から小説を書くと、このような小説『土曜日』になるのであろうか。もうひとつは「分類学」である。この用語はアニタ・ブルックナー (Anita Brookner) が『土曜日』の書評を書く際に用いている。これは小説の筋とは直接関係のないことをまるで専門家のように詳しく解説することである。マキューアンはスポーツのスカッシュ、音楽のブルース、そして料理の「フィッシュ・シチュー」についてかなりのページを割いて説明している。はたして分類学は何か必要があって用いられているのだろうか。最後に、手法として注目に値するのは、『土曜日』が一日24時間の物語に限られていることである。勿論、マキューアンは今までの小説で時間的スパンを一日に限定したことはない。彼にどういう意図があったのだろうか。この小論はそのような疑問点を解きながら、マキューアンの最新小説『土曜日』がいかに超現実的小説であるかを述べるものである。

1. 神経外科医ヘンリー・ペロウン

小説の主人公はヘンリー・ペロウン (Henry Perowne) である。ロンドン中心部の高級住宅に住み、近くのロンドン大学病院に勤める48歳の脳外科医である。妻は新聞社の弁護士ロザライン

ド (Rosalind), 娘のデージー (Daisy) は大学を出てすぐフランスに移り住み近々詩集を出版する将来有望な詩人である。息子のセオ (Theo) は学校こそ満足に行かなかったが、彼も将来を期待される才能豊かなブルースのギターリストである。家族の仲は良い。ペロウンは妻以外の女性には興味が無い。セオともよく会話をする。デージーは半年ぶりにロンドンに戻ってくる。義理の父親を交えてその土曜日は久しぶりに家族が集う。ペロウンは自ら「フィッシュ・シチュー」を作ろうとする。家族という観点から見ると、彼は完全に近い形で恵まれている。

ペロウンは優秀な神経外科医である。小説の冒頭6ページに渡って脳外科手術の描写が続く。外科医師がインフルエンザで欠勤しているため、その日の手術数は普段の2倍に達している。それでもペロウンは短い時間で的確に手術をこなす、あとの縫合は医学実習生に任せて次の手術台に向かう。この6ページは難解な医学専門用語が数多く用いられ、最先端の脳外科手術の様子が描かれている。マキューアンは『土曜日』のために、実際一年間脳外科医のそばで取材し、手術にも立ち会ったそうである。とにかく、ペロウンは大学病院きっての有能な外科医であり、同僚や医学実習生からも信頼を集めている。彼自身、仕事に生きがいを感じ、手術の成功が彼にとってかけがえのない糧となっている。仕事という観点からも、ペロウンは100パーセント満足している。

彼はロンドンの高級住宅街に住んでいる。周りは大きな公園に面して、寝室には大きな窓が3つあることからかなりの邸宅らしいことが窺える。自家用車はベンツのS 500。普通のサラリーマンでは手の届かない高級車である。リモコン式の駐車場を近くに借り、土曜日には歩いて行ける距離だが、会員制のスカッシュ・クラブに車を運転して出かける。空気の汚れた都会の中をエアコンがきいた車でクラシックを聞きながら走るのが好きなのである。久しぶりにその日は家族が集まるというので、自ら魚市場に「フィッシュ・シチュー」の材料を買いに行く。3匹の「アンコウ」の値段は彼が最初買った中古の車よりも高かった。つまるところ、経済的豊かさという観点からも、ペロウンはかなり満ち足りているのである。家族、仕事、財産、どれを取っても欠けているものがないほどペロウンは「幸せ」なのである。このような主人公の設定は今までのマキューアンの小説には見られなかったことである。

もうひとつ主人公の設定で珍しいのは、彼が文学を理解しない科学的視点を持つ医者だということである。マキューアンはこれまでの小説のなかで神秘主義と合理主義の非両立論を好んでテーマにしてきた。たとえば『黒い犬 (Black Dogs, 1992)』のジューンとバーナードがそうである。ジューンは黒い犬に出会ったことに超自然的な運命の力を感じ、以後彼女の生き方を変える。夫のバーナードはそれをただの偶然と判断し、そこに何ら科学的根拠も見出さず、ジューンの変化を「考えすぎ」と分析する。マキューアンの立場はというと、神秘主義に傾いているのが窺える。黒い犬は第二次大戦中ドイツ軍のゲシュタポがスパイの口を割らせるために訓練していた犬で、置き去りにされたあと野犬化したものである。ポーランドの強制収容所の描写と相まって戦争の暗い影を黒い犬は暗示している。もう一つだけ例を引くと『時間のなかの子供 (The Child in Time, 1987)』に象徴的なシーンがある。それはスティーヴンがパブの窓から母親を眺めている場面、彼が生まれる何十年前前に母親もパブの窓の外に息子を見ているのである。時空を超えて子供と母親が見詰め合っている。神秘主義の典型的な例である。ところが『土曜日』ではマキューアンは立場を合理主義に逆転し、科学的視点で書いているのが分かる。

She [Daisy] has a point—straight from school to medical school to the slavish hours of a junior doctor, then the total absorption of neurosurgery training spliced with committed fatherhood—for fifteen years he barely touched a non-medical book at all.³

上の引用に見られるように主人公のペロウンは医科大学から実習生までの15年間医学書以外は、特に文学関係の本は何も読んでいないのである。娘のデイジーに何冊かの文学書を読むように薦められてはいるが気が乗らないでいる。とりわけ、彼は科学者なのでマジカル・リアリズムは理解の範疇を超えた、退屈な手の込んだ作り話にしか思えないのである。

One visionary saw through a pub window his parents as they had been some weeks after his conception, discussing the possibility of aborting him.⁴

これは前述した『時間のなかの子供』の場面への言及である。マキューアンが過去に書いた超自然的場面を、後の小説で自分が非難するのは自己矛盾ではないだろうか。ペロウンは具体的に次のように述べている。

This reading list persuaded Perowne that the supernatural was the recourse of an insufficient imagination, a dereliction of duty, a childish evasion of the difficulties and wonders of the real, of the demanding re-enactment of the plausible.⁵

「超自然主義は不完全な想像力に依存し、義務を投げ出し、現実の困難さと脅威から子供のように逃げることである」とペロウンは自分の意見を述べている。作者としてのマキューアンの視点がどちらにあるのか読者は判断がつかなくなる。文学的下地のないペロウンをマキューアンは逆に皮肉っているのかもしれないとも思う。アニタ・ブルックナーはこの点に関して、

Perowne purports to have had little time for novels. He has dutifully read *Madame Bovary* and *Anna Karenina*, but cannot see the point of invention when reality is so much more potent. This is a double bluff to which McEwan is entitled. He, of course, has done all the reading but has emerged his own man.⁶

と述べている。マキューアンはペロウンの文学を解さない事実重視の科学主義を皮肉っているわけではない。裏の裏をかいて、逆に科学的視点、事実重視の良さを認めているのである。それは、いかに『土曜日』が事実重視の視点で描かれているのかが後に判明することからも理解できる。

2. 分類学 (taxonomy)

『土曜日』を読んでマキューアンの手法でさらに気付くのは、直接物語の筋とは関係のないトピックを詳しく、それも専門的に論じていることである。たとえば、冒頭で脳外科手術の専門用語を駆使して最先端の手術の模様を記している。それも9ページの長さにも及んでいる。これはペロウンが神経外科医であるからある程度納得できる。しかし、スカッシュの講釈は15ページにも及ぶ。5ゲーム・マッチで2ゲーム先取されたペロウンは冷静に「単純なタクティクスに戻ろう。相手の弱点をつけばいい」と考え、麻酔士ストラウスの頭越しにロブを上げる。2ゲームズ・オールになったとき「全てのポイントにドラマがある」とあるが、これはスカッシュを相当プレーしていないと出てこない言葉である。マキューアン自身かなりスカッシュに入れ込んでいるらしいが、物語の筋とは直接関係のないストラウスとペロウンのスカッシュの試合の模様が15ページにも及ぶのはど

こか奇異に感じられる。家に帰った彼はすばやくシャワーを浴び、立ちながら昼食を取ってロンドン西部にある介護施設に母親を見舞う。痴呆症の彼女を見舞ったあと、彼はロンドンに戻り息子のセオのリハーサルを聞きに行く。ここでは4ページに渡ってブルースの講釈がある。ましてや、家に戻ってペロウンが自ら作る「フィッシュ・シチュー」にいたっては、まるでテレビの料理番組の解説を見ているようである。

...and sets about stripping and chopping three onions. Impatient of the papery outer layers, he makes a deep incision, forcing his thumb in four layers deep and ripping them away, wasting a third of the flesh. He chops the remainder rapidly and tips it into a casserole with a lot of olive oil. What he likes about cooking is its relative imprecision and lack of discipline...⁷

このあと料理の講釈は4ページに渡って続き、アンコウ、エイ、そしてクルマエビなどが調理される。実際、マキューアのウェブ・サイトには『土曜日』が出版されてから「フィッシュ・シチュー」のレシピが掲載されるようになった。アニタ・ブルックナーはこのような彼の書き方を「分類法」と名付けている。

The taxonomy so dear to McEwan is applied to other incidents and situations: a game of squash, his son's expertise as a blues guitarist...⁸

なぜこのような、小説の筋とは直接関係のないことをこまごまと書くのであろうか。批評家のマーク・ローソン (Mark Lawson) は次のようにその目的を論じている。

Yet, while the novel is clearly an attempt to set down the textures of everyday life—close reading could improve your cooking, your squash game and even tip you off about what sort of kettle to buy—McEwan has larger concerns than, say, Nicholson Baker in the close auditing of *The Mezzanine* and *Room Temperature*. *Saturday* catalogues the local only in order to focus on the global.⁹

確かにペロウンが料理を作っているとき、通りではデモ隊の騒音がし、テレビではブレア首相がイラク戦争に関して演説している。ローソンが言うように、日常生活の細かな部分、つまり個人の生活を描くことによって、いわば二項対立のように、それとは反対の社会や世界の出来事を強調することができるのであろう。また、マキューアは次のように満ち足りた個人の生活を描くことによって、それを悩ますものがあるとすれば、それは外界にあることを示唆している。

I thought, why not devise a character who actually is happy in his marriage, loves his work, gets on with his children and then finds what's left to trouble him: the world outside. There is plenty of anxiety in the book, but there is also a celebration of cooking, wine, sex, love, children, work.¹⁰

3. 2003年2月15日（土曜日）

ペロウンが小説の冒頭で眠れずにベッドから抜け出して窓の外の公園を見る。冬の2月のロンドンで、その日が土曜日であることは記されている。実際にいつのことかは、この小説が出版されてすぐ批評家たちの興味ある推理の対象になった。土曜の午前中はいつもペロウンはクラブでスカッシュをする。車で出かけた彼はトッテナム・コート・ロードで足止めを食う。夜になって娘のデイジーが久しぶりに彼の家に戻るが、彼女の顔は興奮で覚めやらない。イラク戦争に反対する人々がイギリス各地から集まり、ハイド・パークを埋め尽くしたのであった。これは実際に、2003年2月15日土曜日に起きたことである。200万人の人々がロンドンに集結し、デモ隊は二つに分かれてピカデリー・サーカスを目指した。ひとつはエンバンクメントから、もうひとつはゴウア通りからである。ゴウア通りから南下したデモ隊はトッテナム・コート・ロードを通り、大英博物館の横を過ぎている。小説では、ペロウンがトッテナム・コート・ロードには入れないでいる。実際に、イギリスの各新聞は「英国史上最大の抗議行動」、「200万人が言った。戦争反対!」とトップ・ニュースで報じた。ブレア首相は即コメントを出し、「50万人のデモ? サダムが殺した数より少ないね。100万のデモ? 奴の戦争で死んだ人数より少ないよ」と言っている。小説では、ペロウンが魚市場に行くとき、通りの店先に何台も並べられたテレビにブレア首相が映り、コメントを流していた。つまり、小説『土曜日』で描かれている出来事は2003年2月15日土曜日に実際に起こった出来事とほとんど同じである。アニタ・ブルックナーは、

McEwan is writing close to the news and to the facts: fiction has to take its place within a context of reality. Both are given equal weight, but there can be no doubt that this hyper-real novel is absolutely convincing on its own terms.¹¹

と述べている。マキューアンはフィクションの中に現実を構築するのではなく、現実の中にフィクションを構築しているのである。だから、現実感があって説得力があるのである。

たとえば、もう一つ例を引いてみる。小説では、2000年5月テートモダンの開館式に各界の著名人が招待された。ペロウン夫妻も招待され、画廊で絵を見ていると偶然通りかかったイギリスの首相トニー・ブレアに彼らは紹介される。ペロウンはブレア首相に会ったことがないのに、彼はペロウンを知っているような顔つきであった。

The Prime Minister, who still had hold of his hand, added, "In fact, we've got two of your paintings hanging in Downing Street. Cherie and I adore them."

"No, no," Perowne said.

"Yes, yes," the Prime Minister insisted, pumping his hand. He was in no mood for artistic modesty.

"No, I think you—"

"Honestly. They're in the dining room."

"You're making mistake," Perowne said, and on that word there passed through the Prime Minister's features for the briefest instant a look of sudden alarm, of fleeting self-doubt. No one else saw his expression freeze and his eyes bulge minimally. A hairline

fracture had appeared in the assurance of power. Then he continued as before, no doubt making the rapid calculation that given all the people pushing in around them trying to listen, there could be no turning back. Not without a derisive press tomorrow.

“Anyway. They truly are marvelous. Congratulations.”¹²

案の定、ブレア首相はペロウンを画家と勘違いしていた。彼に間違いを指摘されたときのブレア首相の目が「ごくわずかに膨らんだ」という描写は何故か妙に現実感がある。実際、マキューアンはブレア首相に会い、ペロウンと同じように画家と勘違いされている。ペロウンは親しい人を認知できない病気を‘prosopagnosia（相貌失認症）’と称している。ブレア首相がこのような病気に実際に罹っているのか、ただ偶然ペロウンを他人と勘違いしたのか事実は勿論分からないが、エピソードとしてはかなり面白い。イラク戦争を始めようとしている人物の判断力に疑問を投げかけるものだからである。

このように『土曜日』は2003年2月15日（土曜日）に実際にロンドンで起こった出来事を克明に再現しながら、その中にマキューアンの創造を構築する形を取った超現実的の小説である。では、マキューアンが構築しようとした「創造」とは具体的に何なのであろうか。『土曜日』においてマキューアンが書きたかったテーマは何であらうか。

4. 無作為の恐怖

ペロウンは土曜日の朝は同僚の麻酔医師とクラブでスカッシュをすることになっている。電動仕掛けの駐車場から愛車のベンツ S 500 を出してトッテナム・コート・ロードに向かう。そのとき彼は、自分が幸せかどうか考える。

As he approaches the Tottenham Court Road, he begins a familiar routine, listing the recent events that may have shaped his mood. That he and Rosalind made love, that it's Saturday morning, that this is his car, that no one died in the plane and there's a game ahead and the Chapman girl and his other patients from yesterday are stable, that Daisy is coming—all this is to the good. And on the other hand? On the other hand, he's touching a brake.¹³

夫婦仲は良い。今日は土曜日である。このすばらしい車は彼のものである。早朝燃える飛行機を見たが、結果的に誰も死んでいない。これからスカッシュのゲームがある。少女の手術はうまくいき、他の患者も安定している。娘のデイジーも帰ってくる。全てうまく行っている。ペロウンは家族、仕事、財産という観点からみて非の打ち所がなく幸せである。「ところが？ ところが？」と言って不幸の要因を探そうとしたとき、彼は車のブレーキを踏む。まさにここから彼に「不幸」が襲いかかる。マキューアンのプロット運びはまさに絶妙である。ペロウンの行く手にはオートバイの脇に黄色のジャケットを着た警察官が立っていた。彼は手を上げてペロウンの車を止め、トッテナム・コート・ロードがデモ隊の通過で進入禁止なのを知らせる。ペロウンは迂回して狭い道路に入り、ゆっくりと車を走らせる。そのとき左の路地から赤い BMW がいきなり飛び出してくる。ペロウンのベンツはペイントが薄くはがれた程度で済んだが、BMW のほうは車体が激しくへこみサイドミラーは道端に転がっていた。車の中から出てきた3人の男のうち一人がバクスター

(Baxter) である。よろよろとした歩き方と手の震えから、ペロウンは彼の脳が犯されているのを見抜く。彼はペロウンに車の修理代として 57 ポンド要求する。しかし、前方不注意なのはバクスターのほうなので、ペロウンはそれを拒む。警察を呼ぼうとしたペロウンの胸をバクスターが強く殴り、あとの二人も指輪をした拳で彼の顔を殴ろうとしたとき、ペロウンは「君は父親と同じ病気に罹っている」と叫ぶ。それを聞いたバクスターは仲間二人を遠ざけて、ペロウンの話に耳を傾ける。彼の病気はハンティングトン舞踏病 (Huntington's Disease) であり、バクスター自身もそれを良く知っていた。ペロウンは難病だが必ずしも治療法はないわけではないとその場をつくろい、わずかの隙を見て逃げ去る。

麻酔士のストラウスとその後ペロウンは予定通りスカッシュのゲームをするが、後味の悪い負け方をしてしまう。魚市場に行く途中彼は赤い BMW を後方に目撃するが、それがバクスターの乗った車かどうか確認はできなかった。家に帰って急いでシャワーを浴び、立ったまま昼食を取って、ペロウンは郊外にある介護施設に母親を見舞い、その帰りに息子のセオのリハーサルを聞きに行く。家に戻った彼は「フィッシュ・シチュー」を作り始める。そうこうするうちに、娘のデイジーがパリから戻り、義理の父親もホテルからやってきて幸せな家族の再会が始まろうとしていた。ペロウンは再び自分の幸せ度を確認するという作業を始める。

Nothing matters much. Whatever's been troubling him is benignly resolved. The pilots are harmless Russians, Lily is well cared for, Daisy is home with her book, those two million marchers are good-hearted souls, Theo and Chas have written a fine song, Rosalind will win her case on Monday and is on her way, it's statistically improbable that terrorists will murder his family tonight, his stew, he suspects, might be one of his best, all the patients on next week's list will come through, Grammaticus means well really, and tomorrow—Sunday—will deliver Henry and Rosalind into a morning of sleep and sensuality. Now is the moment to pour another glass.¹⁴

前述の引用にあるように、この種の確認をペロウンが行ったとき、彼はバクスターの車と接触事故を起こしている。この引用で彼は「統計的にみて、今夜テロリストが彼の家族を殺す可能性は薄い」と冗談半端で言っているが、まさにこの後、ナイフを持ったバクスターが妻のロザラインドを人質にしてペロウンの家に押し入ってくるのである。義理の父親を殴りつけ、デイジーを辱め、ペロウンに彼の病気の治療法を聞き出そうとする。

ペロウンはバクスターに出会ってから、スカッシュをしながら、魚市場に向かう途中でも、「フィッシュ・シチュー」を作りながらも彼が再び現れるのではないかと、半ば脅えている。小説の冒頭でペロウンは燃えながらヒースロー空港に向かうジェット機を目撃しているが、そのとき「シュレーディングの猫」を例に引く。飛行機という箱の中に入っている乗客たちの安否は下界で眺めているペロウンには分からない。覆いを被された箱のなかの猫が死んでいるか生きているか、観察者に分からないと同様である。結果は彼の意思とは別のところに存在する。つまり、バクスターに出会ったのはペロウンの意思とは無関係である。数分出かけるのが遅れていれば、バクスターの車とは接触事故を起こさなくて済み、ペロウンは幸せな土曜日を過ごせたはずである。同じように、現実世界では、たまたま地下鉄に乗り合わせたことでテロに巻き込まれる恐怖がある。それは、自分の意思とは無関係なところに存在する現代特有の新しい恐怖である。この「たまたま…」の恐怖に関して、マキューアンは『土曜日』を書き上げている最中、インタビューにこう答えている。

I'm not a religious person. I don't believe that any supernatural forces are guiding my fate or anyone else's. So one is faced with a rather awesome nature of the random.¹⁵

ペロウンがバクスターに出会ったのは何の因果関係もない。全くの偶然なのである。つまり、「無作為の恐怖」なのである。こういった現代特有の恐怖をマキューアンはこの小説で描きかけたのである。今まで彼はいろいろな恐怖を描いてきた。初期の短編小説では人間の狂気にまつわる恐怖であった。それは『愛の続き (Enduring Love, 1997)』でド・クラレンボー症候群に罹ったジェッドに発展している。さらに、それは『黒い犬 (Black Dogs, 1992)』に見られる社会的、政治的恐怖にも発展している。『土曜日』においてマキューアンはまた新しい恐怖を描こうとしたのである。何の理由もなしに、何の因果関係もなしに、突如として巻き込まれるテロの恐怖をテーマに据えているのである。

無作為の恐怖を描くためにマキューアンは、今まで見てきたように新しい手法を駆使している。全てに恵まれた幸せな人物設定、そして分類学は外界に潜む恐怖を示唆する働きがあった。さらに現実の中にフィクションを構築するという手法が、つまり2003年2月15日土曜日という現実が説得力ある背景となって、無作為の恐怖をより現実的なものにしてている。このようにマキューアンの最新小説『土曜日』は新しい手法を取り入れた超現実的小説なのである。

おわりに

無作為の恐怖がテーマになっているからといって『土曜日』が、たとえば *The Ploughman's Lunch* (1985) のような暗い、八方塞の作品かといえばそうでもない。特に最近のマキューアンの作品に感じられるモラル、つまり、人としての生き方もきちんと書かれてある。バクスターが病院に運ばれたあと、麻酔士のストラウスから当直の医師では手に負えない難しい手術になりそうだからペロウンに執刀してくれないかと電話があったとき、彼は承知する。彼の家に押し入り、義父に暴力を振るい、デイジーを辱めたバクスターであるが、階段から落ちて脳内出血を起こし瀕死の重体で今は手術台の上に横たわっている。生命の危険さらされている患者は誰であっても助けなければならぬという医者モラルにペロウンは従ったのである。バクスターの手術を無事に終え、最近手術を終えたばかりの少女の様子を見に病棟へ行くと彼女は深夜なのに起きて何かノートに書きこんでいた。彼女はアンドレア・チャップマン (Andrea Chapman) という名のナイジェリアから来た14歳の女の子である。牧師の叔父と叔母のところを預けられていたが素行が悪く、学校にも行かず麻薬に手を出し万引きを繰り返していた。言葉遣いも尋常ではなく、検査の結果脳の中に腫瘍ができていた。入院しても彼女は看護婦たちをてこずらせ、麻酔士のストラウスも彼女を落ちつかせるのに一役買っていた。しかし、5時間に及んだ手術は成功し、アンドレアは順調に回復していた。ペロウンが「何を書いているの？」と聞くと、アンドレアは「秘密よ」と言いながらも、話したくてしょうがない様子であった。

He says, "I'm very good at secrets. You have to be when you're a doctor."

"You tell no one, right?"

"Right."

"You solemnly promise on the Bible?"

"I promise to tell no one."

“It’s this. Right? I’ve decided. I’m going to be a doctor.”

“Brilliant.”

“A surgeon. A brain surgeon.”

“Even better. But get used to calling yourself a neurosurgeon.”

“Right. A neurosurgeon. Everybody, stand back! I’m going to be a neurosurgeon.”¹⁶

この箇所は小説の中で一番良い場面であろう。きちんと自分の仕事を全うしていれば、誰かが見ているその仕事を引き継いでくれることを教えてくれている。アンドレアはガイアナ出身の医学実習生ロドニー（Rodney）に恋をしている。これはロザラインドがUCLの法学部の学生るとき、脳腫瘍ができて緊急に手術しなければならなくなったとき、身寄りのない彼女に付き添ってくれた医学実習生のペロウンとの恋に重なっていく。このように『土曜日』は無作為の恐怖を描きながらも暗い小説にはならず、人間のモラルそして希望をも描いている小説なのである。

注

1. ‘How could we have forgotten that this was always going to happen?’, *The Guardian*, Friday July 8, 2005.
2. ‘Saturday’, *The Times*, 01 September, 2005.
3. *Saturday*, p. 4.
4. *Ibid.*, p. 66
5. *Ibid.*, p. 66
6. ‘A day in the life of a surgeon’, *The Spectator*, 29 January, 2005.
7. *Saturday*, p. 182.
8. ‘A day in the life of a surgeon’, *The Spectator*, 29 January, 2005.
9. ‘Against the Flow’, *The Times*, 01 September, 2005.
10. ‘The Conversion of Mr Macabre’, *The Sunday Times*, 23 January, 2005.
11. ‘A day in the life of a surgeon’, *The Spectator*, 29 January, 2005.
12. *Saturday*, pp. 145-6.
13. *Ibid.*, p. 78.
14. *Ibid.*, p. 208
15. ‘Ian McEwan, Finishing...’, *Bloomberg.com*, July 16, 2004.
16. *Saturday*, p. 268.

参考文献

イアン・マキューアンの作品

- Black Dogs*, Jonathan Cape, 1992.
Enduring Love, Jonathan Cape, 1997.
Saturday, Random House, Inc., 2005.
The Child in Time, Vintage, 1987.
The Ploughman’s Lunch, Picador, 1989.

参考図書

- Byrnes, C. *The Work of Ian McEwan: A Psychodynamic Approach*, Pauper’s Press, 2002.
Malcolm, David. *Understanding Ian McEwan*, University of South Carolina Press, 2002.
Slay, Jack, Jr. *Ian McEwan (Twayne’s English Authors Series)*, Twayne Publishers, 1996.

書 評

- Adams, Tim. 'When Saturday comes', *The Observer*, January 30, 2005.
- Brookner, Anita. 'A day in the life of a surgeon', *The Spectator*, January 29, 2005.
- Heller, Zoe. "Saturday": One Day in the Life', *The Times*, March 20, 2005.
- Kakutani, Michiko. 'A Hero with 9/11 Peripheral Vision', *The New York Times*, March 18, 2005.
- Lawson, Mark. 'Against the Flow', *The Guardian*, January 22, 2005.
- McEwan, Ian. 'How could we have forgotten that this was always going to happen?', *The Guardian*, July 8, 2005.
- Scurr, Ruth. 'Saturday', *The Times*, September 01, 2005.
- Urquhart, James. 'The brain inside the skull beneath the skin', independentbooksdirect, January 30, 2005.

インタビュー

- Brown, Jeffrey. 'Conversion: McEwan', News Hour, April 13, 2005.
- Caminada, Carlos. 'Ian McEwan, Finishing New Novel, Ponders World After Sept. 11', Bloomberg, July 16, 2004.
- Gerald Jasper. 'The Conversion of Mr Macabre', *The Sunday Times*, January 23, 2005.
- Hage, Volker. 'We're Witnessing a Civil War in Islam', Spiegel. de, July 19, 2005.
- Smith, Zadie. 'Talks with Ian McEwan', *The Believer*, August, 2005.
- Tonkin, Boyd. 'The difference a day makes', *The Independent*, January 28, 2005.